

## 主な出展リスト

COS-001	レオン・バクスト作『青い鳥』衣装(フランス・1920年代 2010年修復)
PO-048	セルジュ・リファール『Symphonie en Blanc』映画ポスター(フランス・1942年)
SA-009	アンナ・パヴロワ『トシボ』陶器人形(ドイツ・1920年頃)
PH-D-195-05ws	アンナ・パヴロワ『トシボ』サイン入り写真(アメリカ・1911年)
PR-PAVOF-111	アンナ・パヴロワハウスプログラム 帝国劇場公演(日本・1922年)
SA-010	ファニー・エルスラー『松葉杖の悪魔』カチュチャ陶器人形(ドイツ・1762年)
AP-213	ファニー・エルスラー『松葉杖の悪魔』カチュチャアンティークプリント(フランス・1836年頃)
AU-050	ファニー・エルスラー 直筆手紙(1850年代・フランス)
UK-001	薄井憲二『踊りの魂賞』トロフィー(ロシア・2016年)
UK-002	薄井憲二『ポリショイ・バレエ』アカデミー名誉教授証書(ロシア・1999年)

## ～ 薄井憲二 略歴 ～

1924年3月30日、東京生まれ、京都市在住。16歳より、日本のバレエ界の礎を築いた東勇作(1910～1971)に師事。東京大学経済学部在学中に入隊し、ハルビンへ。戦後は4年間のシベリア抑留生活を経て帰国、東勇作バレエ団に復帰、数々の舞台に主演し、振付も手がけた。国際バレエ・コンクールの審査員、ポリショイ・バレエ・アカデミーの名誉教授などを歴任。舞踊史研究の第一人者として知られ、著書・訳書も多数。紺綬褒章受章。橋秋子賞、蘆原英了賞、兵庫県功労賞、兵庫県文化賞、踊りの魂賞(ロシア)など多くの受賞歴がある。2006～2015年、日本バレエ協会会長。2005年、兵庫県立芸術文化センター開館時には、オープニング・ガラ公演での『春の祭典』復元上演を監督、自ら「長老」役で出演されている。

## Best Selection



## Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 バレエ・コレクション  
2016 企画展

## 薄井憲二ベスト・セレクション ～ 衣装・陶器人形 ～

2016/10/25 (Tue.)～2016/11/20 (Sun.)

兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」は所蔵点数8000に及び、個人としては世界でも有数の規模を誇ります。創立10周年となる昨年度末、目録全4巻が完結し、その全貌が明らかとなりました。この春には、薄井憲二氏にロシアの舞踊誌が主催する「踊りの魂賞」(ロシア・バレエ振興特別賞/ロシア出身者以外では初の受賞)が贈られ、夏には兵庫県公館にて、特別展が開催されました。

これらを記念し、本展では、薄井憲二氏ご自身のセレクションによる品々、とりわけ、コレクションとしては珍しい「立体物」——バレエ・リュスの重要人物、レオン・バクスト作『青い鳥』衣装、アンナ・パヴロワやファニー・エルスラーら花形バレリーナの陶器人形など——によって構成いたします。バレエは「消える芸術」であり、どんなに望んでも、当時のバレエを観ることは叶いません。しかし、これらの品々は我々の想像力を刺激し、まるで当時のバレエが蘇るような感覚を与えてくれることでしょう。

どうぞごゆっくり、お楽しみください。

© 企画・監修

関 典子(せき・のりこ)／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター

Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

舞踊家・振付家・舞踊研究家。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞等受賞。

多賀成美(たが・なるみ)／薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター

Narumi Taga (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二 バレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22 tel: 0798-68-0223 (代表) fax: 0798-68-0212

Hyogo Performing Arts Center

## ～ Message from 薄井憲二 ～

私がバレエを始めた当時、書籍に出てくるようなバレエを実際に舞台上で観ることはできませんでした。書籍やニュース、ファッション雑誌など、バレエを紹介しているものを古本屋で探し集めたのが、コレクションのきっかけです。コレクションという書籍・書類などの紙資料が一般的ですが、今回の展示では、他ではあまり見ることができないものを選びました。たとえば、アンナ・パヴロワ自作の陶器人形は、世界でも数点しかないものが売りに出たときに急いで購入したものです。

バレエは歴史を知らなければ上手にはなれません。どうい歴史があって、今の表現に至ったのか。今のダンサーには、そういう視点はやや足りないように感じられます。ダンサーとして、研究者として、バレエの魅力と本質を探り、広めるために、これからもコレクションを豊かにするための努力を怠らないように心掛けていきます。



2016年4月27日、ダンチェンコ劇場での「踊りの魂賞」授賞式



『春の祭典』(日本・2005年)



『ドンキホーテ』(日本・1950年頃)

## ～ レオン・バクスト作 『青い鳥』衣装 ～

レオン・バクスト (Leon Bakst 1866～1924) 作  
スタニスラス・イジコフスキー  
(Stanislas Idzikowski 1894～1977) 着用  
フランス・1920年代 2010年修復 73.0×66.0cm



『青い鳥』は、古典バレエの名作『眠れる森の美女』(1890年初演/振付:マリウス・プティパ/音楽:ピョートル・チャイコフスキー)の終幕で踊られる有名なパド・ドゥ。オーロラ姫と王子の婚礼を祝う式典の一部として、フロリナ女王と青い鳥により演じられる技巧的な作品で、ガラ公演などでも頻繁に演じられる。

作者のレオン・バクストは、ロシアの舞台美術家、画家。バレエ・リュス設立当初から舞台美術と衣装デザインを担当し、『クレオパトラ』(1909)、『カルナヴァル』、『シェラザード』(1910)、『薔薇の精』(1911)、『青神』、『救神の午後』(1912)などにおける官能的でエキゾチックなイメージは、舞台美術と同時代のファッションに革命を巻き起こした。1911～1919年には芸術監督に就任。一時はバレエ・リュスから離れたが、1921年には再び『眠り姫』にて復帰し、精巧で法外に高価な装置と衣装をデザイン。アンナ・パヴロワのために『眠れる森の美女』(ニューヨーク・1916)の美術を手掛けた際には、本物の犬・猫・鳥を舞台上に上げたという。

この衣装を着用したのは、ポーランド・イギリスのダンサー、スタニスラス・イジコフスキー。エンリコ・チェケッティに師事し、1911年ロンドン・エンバヤ劇場バレエのミュージカル「ニューヨーク」で初舞台。1912年アンナ・パヴロワ一座、1913年帝室ロシア・バレエで踊り、1914年よりバレエ・リュスに加わる。非常に小柄だったにもかかわらず、並外れた跳躍力と超絶技巧に秀で、ワツラフ・ニジンスキーが演じた役を多く引き継ぎ、1921年に『眠り姫』『青い鳥』を踊った。後進の指導にも努め、1922年、シリル・ボームと共著で『古典劇場舞踊便覧』を出版。

## ～ ファニー・エルスラー 『カチュチャ』陶器人形 ～



ファニー・エルスラーは、オーストリアのダンサー。パリ・オペラ座時代には、マリー・タリオーニの天上性に対し、官能的な側面を体現し、人気を二分した。姉のテレーズと共にアン・デア・ウィーン劇場のホルシェルトのバレエ学校で学び、1818年、長姉アンナが既に所属していたケルトナートーア劇場に入団。1836年、ジャン・コラーリ振付『松葉杖の悪魔』初演に主演し、その中の「カチュチャ」を自ら振り付けた。

「カチュチャ」は、3/4または3/8拍子の伝統的スペイン舞踊。元来はカップルで踊られていたが、エルスラーによる独自のアレンジを好例に、19世紀半ばにはソロとしてのジャンルが確立される。エルスラーの「カチュチャ」は、床を踏む複雑な脚さばき、コケティッシュな眼差し、しなやかに動く上半身が特徴的。F.A.ゾーンによって採譜され、1967年ロイヤル・バレエのバレエ・フォー・オールにより、フィリップ・バーヒル出演で再演。1981年「ファニー・エルスラーのカチュチャ」のタイトルで、マーガレット・バービエリ出演により収録されている。

## ～ アンナ・パヴロワ 『トンボ』陶器人形 ～



アンナ・パヴロワは、20世紀初頭ロシア・バレエの最高峰に君臨する伝説的なバレリーナであると共に、自らの一座「パヴロワ・バレエ団」を率いて世界中にバレエを広めた伝道師でもある。1891年からセント・ペテルブルクのロシア帝室バレエ学校で学び、1899年に卒業後、マリンスキー劇場に入団。1909～1911年にはセルゲイ・ディアギレフ率いるバレエ・リュスに参加し、『ジゼル』『アルミードの館』などを踊り、喝采を得た。

『トンボ』は、パヴロワ自身が振り付け、1915年に発表した代表作。フリッツ・クライスラー「美しいロスマリン」の音楽にあわせ、光沢のある長い羽根をつけたダンサーが軽やかに舞い踊る。現存する映像からは、ピアノとヴァイオリンの音色に合わせて生き生きと飛び回る様を見ることができ、パヴロワは、この愛すべき作品をもとに、自ら陶器人形を制作した。世界に数体しか存在しない、貴重なコレクションである。